『通典』の史學と柳宗元

副島一郎

はじめに

唐の古文家は史學に深い關心を抱く者が多く、柳宗元も韓愈と共に若い頃から「史を爲ることを期して志は甚だ壯ん」（柳宗元「與韓愈致段秀實大尉逸事書」）であった。史館修撰となった韓愈が「史を爲る者は人による禍がなければ、天の刑罰がある。」（夫爲史者、不有人禍、則有天刑。「答劉秀才論史書」）と言ったことに對して、柳宗元は「與韓愈論史官書」で修史と修史者の不遇という事實の間に因果關係はないと斷じ、韓愈の職務怠慢を非難した。この批判は些か性急で生眞面目に過ぎる感があるのだが、彼の天人相關否定の合理思想を示すものとして有名だ。柳宗元のこのような合理思想は實は當時の新しい史學の潮流、すなわち斷代紀傳體に對する編年通史の復興、その精華としての『通典』の出現と關係がある。以下、柳宗元と『通典』との關わりを探っていこう。

第一章　杜佑と王叔文一黨

順宗政權の下、王伾、王叔文をリーダーとして柳宗元たちが權力の中樞にいた時、宰相の任にあったのがかの『通典』の作者杜佑であったことは注意されてよい。現在殘されている柳宗元の文集中から柳宗元と杜佑の具體的な關係を論證するのは難しいが、柳宗元の古文と思想を考える際に杜佑を無視することはできないと思われる。二人の關係について見る前に、まずは杜佑と王叔文一黨とのつながりについて見ておこう。

杜佑（七三四―八一二）、字は君卿、京兆萬年の人、所謂高門望族の出身であり、若くして蔭をもって濟南郡參軍・剡縣丞に補せられている。その後彼が淮南節度使韋元甫に辟召されてその幕僚であった時、同僚であったのが劉禹錫の父、劉緒である。[1] 恐らくはこれが機緣で劉禹錫は後に杜佑の幕下に加わることになるのだが、今しばらく杜佑と劉禹錫、柳宗元との時間的關係を追ってみる。

大曆元年（七六六）　杜佑（三十二歳）『通典』の編纂を開始。
貞元五年（七八九）　杜佑（五十六歳）淮南節度使となる。
貞元九年（七九三）　劉禹錫（二十二歳）、柳宗元（二十一歳）共に進士及第。
貞元十六年（八〇〇）　杜佑、徐・泗・濠三州の節度使を兼任。劉禹錫（二十九歳）、杜佑に辟召されて記室參軍となる。
貞元十七年（八〇一）十月　『通典』二百卷完成。「大傳於世…大爲士君子所稱。」（『舊唐書』杜佑傳）
貞元十九年（八〇三）二月　杜佑、淮南節度使をやめて歸朝、檢校

司空・同中書門下平章事に除せらる。この年閏十月、劉禹錫は監察御史、柳宗元は監察御史裏行を拜して入朝。

貞元二十一年（八〇五）　柳宗元、劉禹錫は王叔文らと改革に乘り出す。柳宗元「貞符」未定稿この年に執筆。（「貞符序」）

劉禹錫は杜佑に辟召されてから永貞の政變に至るまでほとんど常に杜佑のために上奏文を草していたと思われ、現在の劉禹錫の文集中、二卷餘がその文章のためにさかれており、その數は二十八首にものぼる。元和元年に劉禹錫が杜佑にあてた「上杜司徒書」には「私が門下におりますようになってから、ほとんど十年にもなりますが、まだ二晩と續けて外泊をしてお側にいなかったことなどはございません。」（小人自居門下、僅踰十年、未嘗信宿而不侍坐。）と言う。劉禹錫の代作は現存のものは恐らくその一部にしかすぎまい。このように劉禹錫は杜佑ときわめて密接な關係にある以上、貞元十九年、劉禹錫とともに長安に入った柳宗元がその紹介によって閒もなく杜佑を知ったことは十分考えられる。なぜなら、『通典』が完成したのは二年前の貞元十七年であり、それが朝廷に獻じられるや、「その書は當時大いに評判になった。禮樂刑政の源が、千年の閒のことでもまるでそれを掌に指すようであったので、大いに士君子に稱賛された」（其書大傳於時。禮樂刑政之源、千載如指諸掌、大爲士君子所稱。『舊唐書』杜佑傳）からには、柳宗元がその書を讀まなかったとは考えにくいだろう。しかし長安時代、柳宗元が特に杜佑と親しく接した形跡はやはりない。杜佑は劉禹錫を可愛がったが、順宗政權下の改革に際しては王叔文一黨に一定の距離を置いていた。それは當時彼はすでに七十一歳という高齢であったのだから當然でもあるし、名門貴族の彼が王伾や王叔文といった成り上がり者に荷擔しなかったとしても自然なことだ。また彼の口癖は「世渡りのこつは敵をつくらぬことじゃ。」（處世無立敵。『唐語林』卷一）であったという。故に急進派の先鋒のような柳宗元に、或いは杜佑のほうから距離をおいていたようなこともあったかもしれない。しかし杜佑は王叔文らに全く批判的であったとも考えにくいのである。順宗朝において、杜佑は複雜な立場にいたと想像されるが、今ある史料からは具體的なことはよくわからない。[2] だが王叔文らのほうは明かに杜佑の財務官僚としての名聲と手腕には注目し、利用している。その際、劉禹錫がパイプ役になったと思われる。

杜佑の經歷の多くは重要な財務に關係したポストであり、彼はみごとな手腕を發揮してきている。嘗て建中元年に楊炎が兩稅法施行の布告とともに劉晏を追い落として財政機構を改正したところ、「天下の錢穀、總領する所無」（『資治通鑑』德宗建中元年三月）くなり、すぐさま舊制に復した。その時、江淮の水陸轉運使に杜佑を任じているのはやはりその腕を買ってのことだろう。彼は「雅より會計の名有り」（見下）と言われた人物で、當時隨一の財務官僚であったと言ってよい。

さて貞元二十一年三月十七日、その杜佑は度支及び諸道鹽鐵轉運使となり、十九日、王叔文が度支・鹽鐵轉運副使となった。この人事は『資治通鑑』によれば、

「これに先立って王叔文はその一黨らと謀り、國賦を手中に納めれば權柄を握っている者の多くを結集し、軍人の心をつかみ、それでその權力を固められると考えた。又、使職の重權を急に手に入れると人心が服さないであろうと恐れ、（胡三省注：度支、鹽鐵轉運は利權のある役職であり、これより重要な權限はない。王叔文は卑賤より身を

起こしたので、すぐに使職を占めるのは自分でも早すぎると知っており、心中不安になって心配したのだ。）杜佑の財務に明るいという定評を利用し、（また彼は）位が重ければ保身をはかるので、自分たちの意のままになるだろうと考え、それで先ずは杜佑を看板に立て、自分は副使になって實權を握ろうとしたのである。」（先是叔文與其黨謀、得國賦在手、則可以結諸用事人、取軍士心、以固其權、又懼驟使重權〈度支、鹽鐵轉運、利權所在、權莫重焉。王叔文起於卑溷、遽領使職、自知其驟、其心不安而懼。〉人心不服、藉杜佑雅有會計之名、位重而務自全、易可制、故先令佑主其名、而自除爲副以專之。）

という思惑で行われたものだった。『舊唐書』などによれば、王叔文一黨のブレーンとも言うべき存在は他ならぬ劉禹錫、柳宗元であり、この策謀にも劉禹錫とともに柳宗元が關わっていたに違いない。財務に精通した杜佑を表看板として立てたのは、史書の言うごとく單に自分たちの權力固めのためだけではあるまい。榷鹽法、兩稅法などの新經濟政策を導入し、財政國家へと變貌しつつあった唐朝の背景を考えれば、[3] 彼らは實際に杜佑の財務官僚としての經驗、能力を必要としていたのではなかったか。稅收によって官僚たちや軍隊を掌握しようとしたのは、まさに兩稅法導入以後の權力の在り方なのだから。

『資治通鑑』は上に續けて「王叔文は兩使（度支使、鹽鐵轉運使）の次官となったが、實務はとろうとせず、日夜人拂いをしてその黨人と密議をこらし、誰も彼が何をしているのかわかるものはいなかった。」（叔文雖判兩使、不以簿書爲意、日夜與其黨屏人竊語、人莫測其所爲。）と執務の實情を傳えているが、杜佑が當時隨一の財務官僚であったればこそ、王叔文は實務にはタッチしなかったのだと思われる。國家機構運營の根幹がすでに財務にあることを、王叔文自身も「身分の低かった頃、財務が國家の大本なのだ、それを握れば軍事費を増減し、市場を管理する官吏を操れるだろうと常に言っていた。」（叔文賤時、每言錢穀爲國大本、將可以盈縮兵賦、可操柄市士。『舊唐書』王叔文傳）ように、はっきりと認識している。七十一歲にもなる杜佑を擔ぎ出したのは、その名門貫族としての信望を恃んだばかりではないのである。もちろん、この認識は王叔文一人のものではない。劉禹錫は杜佑の側近として働いてきたばかりか、堂舅にはかの劉晏の腹心盧徵がおり、父劉緒も江淮の地で鹽鐵の職務に携わっていたのである。[4] 劉禹錫もまた或は王叔文以上に財務の重要性を認識していたに違いない。また王叔文一黨に用いられた者に程异という人がおり、王叔文の失脚によって彼もいったんは岳州刺史に、さらに郴州司馬に貶される。しかし元和の初めに杜佑に推された李巽が鹽鐵使となると「程异が財務に通曉しているのを推薦し、前過を捨てて採用することを請願し、拔擢して侍御史とし」（薦异曉達錢穀、請棄瑕錄用、擢爲侍御史。『舊唐書』程异傳）、李巽は劉晏を超えるほどの成果を擧げた。これは程异の助けがあったからだと言われている（『舊唐書』李巽傳）。この程异は財政實務の一流の專門家だったわけである。このような人閒を登用していたわけだから、王叔文たちの時代認識と政治方針はきわめてはっきりしていよう。以上のことから考えて柳宗元が『通典』を讀んでいなかったと考えるのはほとんど無理なことだ、なぜなら、まず何よりも『通典』こそは杜佑の財務官僚としての經驗と思想の結晶だと考えられるからである。

第二章　『通典』の史學と柳宗元

『通典』誕生の經緯は表面的にはきわめて簡單である。『舊唐書』杜

佑傳に「時は遡り開元の末、劉秩は經史百家の言說を採り、『周禮』六官の職掌とする所を取り上げ、部門別に分類した書物三十五卷を撰述し、號して『政典』と言った。大いに當時の識者に賞贊され、房琯などはその才能は劉更生（向）以上だと考えたものである。杜佑はその書を手に入れてその旨をつぶさに檢討し、條目がまだ不十分であると考えたので、それを擴充し、『開元禮』と『樂』を加え、二百卷の書物を完成した。號して『通典』と言った。」（初開元末、劉秩採經史百家之言、取『周禮』六官所職、撰分門書二十五卷、號曰『政典』、大爲時賢稱賞、房琯以爲才過劉更生。佑得其書、尋味厥旨、以爲條目未盡、因而廣之、加以『開元禮』、『樂』、書成二百卷、號曰『通典』。）とある如く、『通典』は『政典』を直接の基礎として發展させたものである。[5] 劉秩は劉知幾の第四子、その事跡の詳しいことはわからず、『政典』を著すに至った動機、またその內容についてもほとんどわからないが、杜佑が『通典』を著わした志は『政典』を見るまでもなく、「進通典表」に十分現われている。

「そもそも『孝經』、『尙書』、『毛詩』、『周易』、『（春秋）三傳』は、みな父子君臣の要道、十倫五敎の宏綱であり、日月が下に臨み、天地の大いなる德の如くであって、百王が法則とし、終古より遵いきたるところであります。しかしながら、多くは言葉の記錄であり、法制を存することは少なく、私めの狹い識見では、精緻深遠な本質に達することはできようはずもなく、むやみに荒唐の言をなすばかりですが、なんとか憶測を試みているような次第でございます。學問に暗いことは常に自覺致しておりますが、私が政治の根本法則を探ろうと願い、歷代の多くの賢者の高論をあらまし見ますれば、多くは（當時の政治の）紊亂や失敗の弊害を述べているばかりで、時に弊害を正し救う方法を缺いているものがございます。臣は凡庸淺薄でありますれば、（歷代諸賢の高論に言葉を）付け加えることも創ることもできようはずがございませんが、（物事は）その始めを探究しなければ、その行く末を見通すこともできないのであります。……（それゆえ）昔の是非につきましては、今後の鑑とすべきものでありますれば、書物に敷き竝べ、粗略ながら究め求めたのでございます。」（夫『孝經』、『尙書』、『毛詩』、『周易』、『三傳』皆父子君臣之要道、十倫五敎之宏綱、如日月之下臨、天地之大德、百王是式、終古攸遵。然率多記言、罕存法制、愚管窺測、豈達精深、輒肆荒唐、試爲臆度。每念懵學、冀探政經、略觀歷代衆賢高論、多陳紊失之弊、或闕匡拯之方。臣既庸淺、寧詳損益、未原其始、莫暢其終。……至於往昔是非、可爲今來龜鑑、布在方册、亦粗研尋。[6]）

彼がこのように從來の經書や前人の議論に不滿を抱いて、『通典』を作ったのは、第一には官僚としての仕事上の必要であったと思われる。唐代に入ると詔勅起草のために歷史事實をも類書的に分類することが行われだしており、[7] 『通典』も政策の立案、法制の決定に關わる上奏文執筆のための事例集として作られたと言ってもよい。しかし『通典』はそれにとどまらない思想的意味を持っている。杜佑は類別するばかりでなく、通史的體裁を採ることによって古今の法律制度の演變とその成敗損益の原因を明らかにしようとしたのである。このような考え方を生み出したのは新しい經濟政策に携わる財務官僚としての經驗と思想であった。それゆえ杜佑は財務を國家經營の根本にすえる思想によって『通典』を構成しようとしたのである。『通典』自序に言う。

「そもそも治道の第一は敎化を行うにあり、敎化の根本は衣食を十

分にすることにある。『易』は人を結集することのできるのは財物だと言っており、また『洪範』の八政に一に曰く食、二に曰く貨とあり、管子は倉廩實ちて禮節を知り、衣食足りて榮辱を知ると言い、孔子は、既に富み而して敎うと言っておられる。これらは敎化の根本が衣食にあることを言っているのである。そもそも敎化を行う（根本）は職官を設けることにあり、職官を設ける（根本）は官僚の才覺を審定することにあり、官僚の才覺を審定する（根本）は試驗制度を精密にすることにあり、禮を制定して風俗を正し、音樂を作って心をなごませる、これが先哲王の世を治める偉大なる法則なのである。」（夫理道之先在乎行敎化、敎化之本在乎足衣食。『易』稱「聚人曰財。」『洪範』「八政、一曰食、二曰貨。」『管子』曰「倉廩實知禮節、衣食足知榮辱。」夫子曰「既富而敎。」斯之謂矣。夫行敎化在乎設職官、設職官在乎審官才、審官才在乎精選擧、制禮以端其俗、立樂以和其心、此先哲王致治之大方也。）

杜佑はこの信念によって『通典』を構成したのであって、彼の考えは極めて明確だ。彼は財務官僚として、經濟を充實發展させることが國家經營に最も重要なのだと考えており、この主張は食貨篇の隨所にみることができる。[8]

杜佑はそれまでの斷代正史の「志」の部分を通史的體裁に作り變えたのであるが、この體裁の根底にあるのは、杜佑自身が言うとおり、古今の制度の成敗損益、言い換えれば窮通の理を明らかにしようとする思想に他ならない。そうしてこそ政治をうまく行うことができると考えるのである。そして杜佑がこのような考え方をするのもまた財務官僚らしい歷史觀、社會觀によるものである。食貨篇十二の輕重の論に言う。

「さて隴右道で（節度使皇甫惟明）は青海において（吐蕃との）戰いが有り、范陽道で（安祿山）は天門の（顏眞卿との）戰いがあり、朔方道では阿布思が裏切り、劒南道では閣羅鳳が叛亂し、或いは全軍が返らず、或いは城市がつづけざまに陷ちた。先に軍隊を動員したために、しばしば飢饉が起こったのであり、凶逆の輩はその隙に乘じて兵を起こし、二つの都には防衛力がなくなったのだ。思うにこれは人が引き起こした事であって、天の定めた時勢のせいではないのである。……そもそも德が厚ければ感化は深く、感化が深ければ動搖し難く、人心が繫がれば、速やかに大事變にも勝利することができるのである。少康、平王がそうであった。もし稅金が高ければ民情は離れてしまうし、民情が離れてしまえば動搖しやすく、人心が去ってしまうと、王は誰からも見離されてしまうのである。殷辛、胡亥がそうであった。今、戰役はいまだ止まず、經費はなおかさばり、重くすれば人民は負擔に堪えず、輕くすれば費用が足らないのだが、古の要點を酌んで今の時宜に適わせ、弊害がおこったならば改革することを考えれば、恩澤は行き渡って盡きることがない。……そ（民）の衆寡をしらべ、その優劣を量れば、經濟發展の道は自ずから方法がある。」（既而隴右有青海之師、范陽有天門之役、朔方布思之背叛、劒南羅鳳之憑陵、或全軍不返、或連城而陷。先之以師旅、因之以薦饑、凶逆承隙構兵、兩京無藩籬之固、蓋是人事、豈唯天時。……夫德厚則感深、感深則難搖、人心所繫、故速戡大難、少康、平王是也。若斂厚則情離、情離則易動、人心已去、故遂爲獨夫、殷辛、胡亥是也。今甲兵未息、經費尙繁、重則人不堪、輕則用不足、酌古之要、適今之宜、既弊而思變、乃澤流無竭。……審其衆寡、量其優劣、饒贍之道、自有其術。）

杜佑は窮通は人爲であって運命ではなく、時代に適應して改革を行

えば、政策は行き詰まることはないと言う。また經濟的發展には「審其衆寡、量其優劣」というように、人口と生産力に應じて課税する合理的方法があるとするのである。これが卽ち彼の信念なのだ。この信念は財務官僚としての經驗から生まれたものであるのは間違いないだろう。そしてこれが窮通の理を明らかにするための通史『通典』を生み出したのである。

次に『通典』と柳宗元の關係についてみていきたい。柳宗元の思想的作品を代表するものに「貞符」がある。これは永州時代に書き上げられているが、原案は貞元二十一年、長安ですでに書き始められている。『通典』完成の四年後である。「貞符」は

「吳武陵が臣に對して言う、董仲舒の三代受命の符についての回答は誠に正しいのでしょうか、誤りなのでしょうか。臣は言う、誤りである。董仲舒だけではない。司馬相如から、劉向、揚雄、班彪、彪の子の固、皆あざ笑うべきものを踏襲し、古の瑞物を推したてて受命に配している。その言説はでたらめ呪術師と同類であり、後世を惑わし亂している……」（吳武陵爲臣曰、董仲舒對三代受命之符、誠然非耶。臣曰非也。何獨仲舒爾。自司馬相如、劉向、揚雄、班彪、彪子固、皆沿襲嗤嗤、推古瑞物以配受命。其言類淫巫瞽史、誑亂後代……）

と董仲舒から班固に至る前人の受命における天人相關思想を批判することから始まるのだが、その批判は柳宗元の歷史觀に支えられている。彼は權力の發生をどう見ていたか。「貞符」には引き續いて

「古は素朴無知で爭いがなかったが、それが末流になって誤り、下っては强奪し、鬪い怒り、暴れまわり、氣ままに邪惡な暴威をふるうことになったのだなどと、誰が稱しているのか。これは道を知らないのだ。そもそも人の初めは總總として生まれ、林林として群れていた。……交わっては爭い、目をつりあげては鬪ったのである。力の强い者が毆り、齒の鋭い者が嚙み、爪の固い者が引き裂き、群れの多い者が壓倒し、武器の優れた者が殺し、屍は亂れて重なり合い、草野は血にまみれたのだ。そうした後、强く力ある者が現れてこれを統治し、しばしば山川の險阻な場所にたてこもり、號令をもって動き、そして君臣と軍隊の法律ができたのである。德の明らかな者が位を繼ぎ、道の荒んだ者は位を奪われた。そこで聖人が出現し、黃帝と言った。その軍隊を動員して、國內を制覇し、類を統一し、法制度量衡を統一したが、至公の道はまだ樹立できなかった。……これから見れば、原初は、極めて亂れていたのであって、その後だんだん治まるようになったのである。」（孰稱古初朴蒙空侗而無爭、厥流以訛、越乃奮敓鬪怒振動、專肆爲淫威。曰是不知道。惟人之初、總總而生、林林而羣。……交焉而爭、睽焉而鬪。力大者搏、齒利者齧、爪剛者決、羣衆者軋、兵良者殺、披披藉藉、草野塗血。然後强有力者出而治之、往往爲曹於險阻、用號令起、而君臣什伍之法立。德紹者嗣、道怠者奪。於是有聖人焉、曰黃帝、遊其兵車、交貫乎其內、一統類、齊制量、然猶大公之道不克建。……由是觀之、厥初罔匪極亂、而後稍可爲也。）

と述べる。柳宗元は君主の權力はその發生において天から與えられたものではなく、極めて物理的な力關係によることを主張するのである。しかも彼は暴力が支配していた原始狀態から現在の文明社會へと進歩してきたと見ている。

このような社會觀、歷史觀は、柳宗元の獨創ではなく、實は『通典』から多大な啓發を受けたのではないかと思われる。例えば『通典』禮篇八・立尸義には

「古の人は素朴質實で、中華は夷狄と同じであり、祭祀に尸を立て、

人間を殉葬し、獸を食らい血を飲み、巢や穴に住み、墓に土を盛らず樹も植えず、手でつかみ食らい、同姓で婚姻し、名を避けなかった。中華は土地が眞ん中にあり氣が正しく、人の性格は溫和で才能に惠まれていたので、次々に聖哲を生み、次第に鄙風を改めたのだ。」（古之人朴質、中華與夷狄同、有祭立尸焉、有以人殉葬焉、有茹毛飲血焉、有巢居穴處焉、有不封不樹焉、有手搏食焉、有同姓婚娶焉、有不諱名焉。中華地中而氣正、人性和而才惠、繼生聖哲、漸革鄙風。）と言い、中國といえども、社會は原始的野蠻狀態から文明的狀態へと進歩してきたとするのである。さらに杜佑は權力の發生交替の原理、ひいては社會體制を決定するものとして天意ではなく「勢」を考えている。『通典』兵序に言う。

「そこで猛將や强兵、善い馬や優れた兵器は都にはなくなり、二統（安祿山、史思明）に集まった。邊境の勢力はすでにこのように强く、朝廷の勢力はまたあのように弱いので、邪な人間はこの機會に乘じ、禍亂を樂しみ欲望を滿たさんとして、害惡でもって脅し利益でもって誘った。安祿山が兵を擧げ朝廷を侮ったのは、必ずしも平素から凶惡な謀り事を企んでいたのではなく、そもそも地勢的に逼迫させられるとその勢力の程は疑われ、力が等しければ亂が起こるのであって、事理としてそうならざるを得なかったのである。……〝朝には伊尹や周公であったのが、夕べには桀王や盜跖となる〟、と言う俗諺があるが、これは形勢が彼らを追いやってここにまで至らしめたのである。」（於是驍將銳士、善馬精金、空於京師、萃於二統。邊陲勢强既如此、朝庭勢弱又如彼、姦人乘便、樂禍覬欲、脅之以害、誘之以利。祿山稱兵內侮、未必素蓄凶謀、是故地逼則勢疑、力侔則亂起、事理不得不然也。……語曰「朝爲伊、周、夕成桀、跖」、形勢驅之而至此矣。）

これは社會の混亂を天意や叛逆者の人間性にその原因を求めずに、所謂勢力の均衡に求めているのである。以上、二點において「貞符」の思想は杜佑との共通性を見いだせるわけだが、それは果たしてどこまで『通典』から學んだものと言えるだろうか。このような思想は杜佑以前にはなかったのだろうか。そこで杜佑、柳宗元の唐代における思想的位置を明らかにするために、一つ比較の對象を求めてみたい。それには古文家が適當だろう。なぜなら、『通典』に序を冠した李翰は李華の宗子であり、杜佑幕下には梁肅がいるなど、杜佑と古文家のつながりは淺からぬものがあり、彼は思想的にも古文家を中心とした流れの中にいると考えられるからだ。杜佑よりやや先立つ古文家に賈至（七一八―七七二）なる人がいる。李華や蕭穎士らと同世代である。寶應二年（七六三）、選擧制度に關して彼は次のような議論をしている。

「そもそも先王の道が消滅すれば小人の道が增長し、小人の道が增長すれば亂臣賊子がそこから出現する。……今、士を取るに小道を試すばかりで遠大なものを試さず、仕官を求める者を末術に走らせているのは、導きかたが誤っているのである。それが安祿山が一呼して天下が震動し、史思明が再び亂を起こして十年も回復しない原因である。もし禮讓の道を弘め、仁義の風を著らかにしていたならば、忠臣孝子が軒竝み諸侯にできるほど輩出し、謀叛の心がきざすこともなく、人心も動搖することがなかったのである。」（夫先王之道消、則小人之道長、小人之道長、則亂臣賊子由是出焉。……今取士、試之小道、不以遠者大者、使干祿之徒、趨馳末術、是誘導之差也。所以祿山一呼、四海震蕩、思明再亂、十年不復。向使禮讓之道弘、仁義之風著、則忠臣孝子比屋可封、逆節不得而萌也、人心不得而搖也。『舊唐書』

文苑傳中・賈至)

これに對し他の『議する者、之を然りとす』るのである。もちろん兵制論と選擧論を單純に比較することはできないが、食貨篇の輕重論に見えるような人心の歸趨は賦稅の多寡によるのだとする認識を合わせ見るならば、杜佑の思想がいかに賈至の時代と異質であるかは明白だ。杜佑は經濟と物的力關係において社會と歷史を認識しているのである。これは財務官僚の眼と言ってよい。そしてこの權力の原理を物理的勢力關係に求める發想は財務官僚杜佑を抜きにしてはありえないだろう。

このように『通典』は編年通史の復興であり、それは新しい思考樣式の出現でもあった。さらにこれは春秋學の復興と古文にも關係している大きな流れなのだ。中唐の啖助、趙匡の春秋學が古文と深い關係にあるのはよく知られているが、その趙匡も窮通の理を明らかにする史學の必要なことを提唱している。大曆年間、洋州刺史の任にあった時に書いた『擧選議・擧人條例』は當時の貢擧の弊害十一を列擧し、大膽な改革案を示したもので、史學を課すことも提議している。

「宋より以後、史書は煩雜で冗長でありますれば、ただ政治の成敗の原因、及びその人物の損益の當代に關係するものだけを問い、その他は一切問わないことを御願い申しあげます。」(自宋以後、史書煩碎冗長、請但問政理成敗所因、及其人物損益關於當代者、其餘一切不問。『通典』選擧五)

趙匡の議論は實用的人材登用の面から窮通の理に通じうる史學を求めるものだ。島一氏は、趙匡と杜佑とは、柳宗元が師と仰いだ陸淳を介して學問的繋がりがあり、彼らの議論の共通性は決して偶然ではないと指摘しておられ[9]、さらに稻葉一郎氏は趙匡の春秋學は劉秩の父知幾の『史通』の『左傳』學への傾倒と脫却の迹を示すものとの見解を示しておられる[10]。劉知幾は『左傳』を重んじ編年通史の意義を斷代紀傳體とともに十分評價し、理想の史學の條件として荀悅の五志の他に更に三科を增廣すべきで、その第一は沿革を敍すことだと考えている(今更廣以三科、用增前目、一曰敍沿革……。『史通』書事篇)。劉秩の『政典』が『史通』の思想的發展の上にあるのは言うまでもないだろう。この劉秩との關係は明らかではないが、同じ開元年間、古文の先驅者として知られる蕭穎士は符節を合するように『歷代通典』なる書物を計劃している。これは漢の元年十月から隋の義寧二年までの『春秋』にならった通史であり、「『左氏傳』からはその文章のよさを取り、『穀梁傳』からはその簡約さを模範とし、『公羊傳』からはその精確さを獲得し、三傳の長所を綜合するのです。一字を擧げて凡例を示します。こうして孔子、左丘明を扶助して復興し、司馬遷、班固が敎えに從わないのをしりぞけます。」(於左氏取其文、穀梁師其簡、公羊得其覈、綜三傳之能事、標一字以擧凡。扶孔左而中興、黜遷固爲放命。「贈韋司業書」)という三傳を總合し、紀傳體を排斥するものであった。さきの趙匡は蕭穎士に弟子の禮を執り、蕭夫子と呼ぶ關係であり(『新唐書』文藝・蕭穎士)、蕭穎士の春秋學も無關係ではありえない。このように通史と春秋學と古文とは相互に密接に關わり合っているのである。そして柳宗元もこの流れの中にいたのである。

杜佑と柳宗元とがつながるとするなら『通典』職官篇十三の王侯總序はさらに重要なものだ。これは杜佑の封建論ともいうべき文章なのである。杜佑は權力發生交替の原理を勢という概念で考えたが、彼によれば、勢はひいては歷史發展の原理であり、社會體制をも決定するのである。ここにおいて我々は柳宗元の「封建論」の有名なテーゼ

「封建は聖人の意にあらず、勢なり。」をすぐ思い浮かべることができよう。實際、杜佑の封建論と柳宗元の「封建論」とはただならぬ關係にあると思われる。以下、主要な論點を比較對照してみよう。

A　勢

杜佑

「これ（南朝劉宋）より以來、諸侯を建てることは日々なくなり、古道を行おうとしても、勢としてはそれに從うことができなくなった。天は民衆を生み、君主を立てて民衆を治めさせた。だから人民が多くなれば統治者の政治は成功であり、人民が少なくなれば統治者の政治は失敗なのである。多ければそれは平安によってもたらされたのであり、少なければそれは危亂が引き起こしたからである。」（自茲以還、建侯日削、欲行古道、勢莫能遵。天生烝人、樹君司牧。人既庶焉、牧之理得、人既寡焉、牧之理失。庶則安所致、寡則危所由。）

柳宗元

「民衆の存在した最初から勢はあったのだろうか。初めからでなければ、封建のあるはずがない。ゆえに封建は聖人の意志ではないのである。人は最初、萬物と共に生まれてきた。草木はしんしんと茂り、鹿やいのこが群れあふれていたが、人は打ったり嚙みついたりできず、しかも毛も羽もないので自らを守ることができなかった。だから荀卿は人間は道具を使って事を行う存在だと言ったのだ。そもそも道具を使う者は必ず爭い、爭って埒があかなければ、きっと曲直を判斷できる者にしたがってその命令を聽くのである。知惠があり聰明な者には服從する人間は必ずたくさんいる。正義を敎えて改めなければ、必ず痛いめに遭わせてその後畏れさすのである。これから君長と刑政が生まれた。故に近い者が集まって集團をつくる。集團が分かれれば、その爭いは必ず大きく、大きくなった後に軍事がおこり德がうまれる。又（德の）偉大な者がおり、多くの集團の長は又彼に從って、命令を聽き、そうしてその配下の者たちを安心させ、そこで列侯が生まれたのである。かくて爭いもさらに大きくなる。德のさらに偉大な者に列侯は又從って命令を聽き、そうしてその封域を平安にし、そこで方伯、連帥の類が生まれたのである。かくてその爭いもさらに大きくなる。德のさらに偉大な者に方伯、連帥の類は又從って命令を聽き、そうしてその民衆を平安にし、そうした後に天下は統一されたのである。こういうわけで村長が生まれてその後に縣知事が生まれ、縣知事がいてその後に諸侯が生まれ、諸侯がいてその後に方伯、連帥が生まれ、方伯、連帥がいてその後に天子が生まれたのだ。天子より村長に至るまで、その德はその人にあるのであるから、死去すれば必ずその世繼ぎを求めてその人を奉じたのである。故に封建は聖人の意志ではなく、勢なのである。」（勢之來也、其生人之初乎。不初、無以有封建。封建非聖人意也。彼其初與萬物皆生。草木榛榛、鹿豕狉狉、人不能搏噬而且無毛羽、莫克自奉自衛。荀卿有言、必將假物以爲用者也。夫假物者必爭、爭而不已、必就其能斷曲直者而聽命焉。其智而明者、所伏必衆、告之以直而不改、必痛之而後畏、由是君長刑政生焉、故近者聚而爲羣。羣之分、其爭必大、大而後有兵有德。又有大者、衆群之長又就而聽命焉、以安其屬、於是有諸侯之列。則其爭又有大者焉。德又大者、諸侯之列又就而聽命焉、以安其封、於是有方伯、連帥之類。則其爭又有大者焉。德又大者、方伯、連帥之類、又就而聽命焉、以安其人、然後天下會於一。是故有里胥而後有縣大夫、有縣大夫而後有諸侯、有諸侯而後有方伯、連帥、有方伯、連帥而後有天子。自

天子至於里胥、其德在人者、死必求其嗣而奉之。故封建非聖人意也、勢也。）

杜佑は劉宋以後封建を行おうとしても、勢として行いえなくなったと言い、柳宗元はそもそも勢によって封建が行われるようになったと言う。いずれであれ社會體制を決定するものとして勢を考えている點で彼らは一致している。ここで杜佑は勢と民衆の關係を柳宗元ほどには明言していないが、食貨篇の輕重論や兵序をあわせ見るならば、勢は卽ち民衆の增減に左右されるとしていることは明らかであり、柳宗元が勢を民衆の去就として捉えているのと一致している。卽ち二人とも勢という概念で權力の基盤を民衆においているわけであり、認識の本質において一致していると言ってよい。さらにこのような增減去就が古道や聖人の意がどちらにあるかといった理念によるものではなく、根本的に民衆の生命の安全と生活の安定によるとすることも共通した認識だ。では周の封建と勢はどういう關係にあるのか。

B　周の封建

杜佑

「昔、諸侯を建てたとき、多くは舊くからの國であった。周は藩屏を立てたが、十を數えるのみで、その他は皆先に封ぜられていたので、その爵位を廢さなかったのである。まことに自らの利益を選ぶことができないまま、諸國を建て、損害を恐れて郡縣を立てなかったのだ。だから事は皆相因ると言うのは、こういう意味である。」（自昔建侯、多舊國也。周立藩屏、唯數十焉、餘皆先封、不廢其爵。諒無擇其利、遂建諸國、懼其害、不立郡縣、故曰事皆相因、斯之謂矣。）

柳宗元

「殷、周が（封建を）改めなかったのは已むを得なかったからである。思うに、諸侯の殷に歸する者は三千であり、それによって夏を斥けたのだから、湯は廢することができなかった。周に歸した者は八百であり、それによって殷に勝ったのだから、武王は易えることができなかったのである。」（夫殷、周之不革者、是不得已也。蓋以諸侯歸殷者三千焉、資以黜夏、湯不得而廢、歸周者八百焉、資以勝殷、武王不得而易。）

ここで杜佑も柳宗元も、周が封建制を採らざるを得なかったのは聖人の意志でも道義からでもなく、單に諸侯との力關係であったと考えている。

C　封建制の衰滅

杜佑

「そもそもどんな法律制度にも弊害はあるのだから、それによって起こる弊害の大小を考えればよいのだ。政體が封建制であれば、初めは防衛據點を連ねた布陣や大岩の堅固さがあるが、その終には君主が臣下と同じ位置に立ち、或いは肩を射拔かれる屈辱がある。遠い昔（夏殷周）、多くの國は滅亡し、近い頃（魏晉）でも相對立して戰爭をしたのであり、所謂その弊害は大きいのである。」（夫立法作程、未有不弊之者、固在度其爲患之長短耳。政在列國也、其初有維城磐石之固、其末有下堂中肩之辱。遠則萬國屠滅、近則鼎峙戰爭、所謂其患也長。）

「そもそも君主が尊ければよく治まり、臣下が强ければ亂れ危ういのである。」（夫君尊則理安、臣强則亂危。）

柳宗元

「(諸侯は)合しては朝見參謁し、離れては防衛防御の働きをなす。しかし夷王にまで降ると、禮をそこない尊上を傷つけ、堂を降って朝見する者を迎えた。宣王を經て中興復古の德(の時代)をさしはさみ、南征北伐の威信を誇ったが、ついに魯侯の世嗣を定めることができなかった。衰えて幽王、厲王にいたると王室は東に移って自ら諸侯となった。その後、鼎の輕重を問う者があり、王を射て肩を射拔く者がおり、凡伯を討ち、萇弘を誅する者がいた。天下は分裂し、君を君とする心がなくなったのである。私は周は喪われること久しく、實のない名だけをいたずらに諸侯の上に建てていただけだと思う。諸侯の方が盛强だと、尾が大きすぎてふるえないというような弊害は避けえないのだ。遂に分裂して十二となり、合して七國となり、權威は陪臣の邦に分かれ、國は後封の秦に滅ぼされたのであれば、周の亡びた端緒はここにあったのだろう。」(合爲朝覲會同、離爲守臣扞城。然而降于夷王、害禮傷尊、下堂而迎覲者。歷于宣王、挾中興復古之德、雄南征北伐之威、卒不能定魯侯之嗣。陵夷迄於幽、厲、王室東徙、而自列爲諸侯矣。厥後、問鼎之輕重者有之、射王中肩者有之、伐凡伯、誅萇弘者有之、天下乖盭、無君君之心。余以爲周之喪久矣、徒建空名於公侯之上耳。得非諸侯之盛强、末大不掉之咎歟。遂判爲十二、合爲七國、威分于陪臣之邦、國殄於後封之秦、則周之敗端、其在乎此矣。)

二人とも封建制衰滅の理由を構造的に主君と諸侯の權力關係が逆轉しうるからだと見ている。彼らは制度自體の缺點を見据えており、そこに聖人の意志というような先驗的要素を介在させない。では、郡縣制が封建制より優れているのだとしたら、なぜ秦は滅びたのか。

D 秦の滅亡

杜佑

「政體が郡縣であると、初めは天下を一家とするほどの盛强さがあるが、その終には土崩瓦解の虞れがある。漢の高祖、後漢の光武帝及び國初においては、戰勝の勳功は集まりやすかったのであり(戰亂は長期にわたらず)、所謂その弊害は小さいのである。」(政在列郡也、其初有四海一家之盛、其末有土崩瓦解之虞。高、光及於國初、戡定之勳易集、所謂其患也短。)

「もしも胡亥に嗣がさず、趙高が用いられなければ、稅を免除された貧しい民衆も叛亂を起こさず、酷法が施行されなければ、民衆が離心するには至らなかっただろうし、陳勝、項羽は叛亂を起こすきっかけをつかめなかったであろう。」(向使胡亥不嗣、趙高不用、閭左不發、酷法不施、百姓未至離心、陳、項何由興亂。)

柳宗元

「秦は天下の優位な版圖を據點にして、形勝の地に都を置き、天下を支配して、掌の内においた。これがその成功の理由である。數年もせぬうちに天下は大いに壞亂したが、それにはわけがある。しばしば萬人を勞役にこき使い、刑罰を嚴しくし、その財産をしぼり盡した。農民や邊境防衛にあてられた者たちは周圍を見回して連合し、大呼して群れをなした。この時はすなわち叛亂を起こした民衆はいたが、叛亂を起こした官吏はいなかったのである。下々の民衆は(秦王朝を)怨んだが、上の官吏は(秦王朝を)畏れていたのである。天下は相合して郡守縣令を殺し各地で蜂起した。衰滅の原因は民衆の怨恨にあるのであって、郡縣の制度の缺陷ではない。」(據天下之雄圖、都六合之

上游、攝制四海、運於掌握之內、此其所以爲得也。不數載而天下大壞、其有由矣。亟役萬人、暴其威刑、竭其貨賄。負鋤梃謫戍之徒、闔視而合從、大呼而成羣。時則有叛人而無叛吏、人怨於下而吏畏於上、天下相合、殺守劫令而並起。咎在人怨、非郡邑之制失也。）

Dでは論點にわずかな違いはあるものの、B、Cと同じく、二人は認識の質において一致していると言えるだろう。卽ち、郡縣の制度自體から生じる得失を見極めようとする態度である。杜佑は郡縣は土崩瓦解の虞れありというものの、崩壞の原因となったのは胡亥、趙高だとしており、結局のところ制度自體の缺陷だとは見ていない。柳宗元の論はこの點を敷衍してさらにはっきりと打ち出したものだ。CとDにおいては思想的文脈だけではなく、用語の上でも、柳宗元は杜佑を踏襲していると言ってよい。ではいろいろの條件を勘案した上で結局何故に郡縣制のほうがすぐれると言うのだろうか。それは二人とも民衆の生活の安定と繁榮を政治の目的とする民本思想の故にほかならない。次にそのことを見てみよう。

E　民本

杜佑

「もしも民衆のために君主を置くならば、人口の增えることが求められるのだから、まことに政體は郡縣であるべきだが、そうすれば君主の家系はあるいは續かないかもしれない。もしも君主のために民衆を生むのならば、人口の減ることを氣にしないのだから、まことに政體は封建であるべきで、そうすれば君主の家系は永く續くだろう。君主の家系は永く續いても、人民は少なくなり、君主の家系は續かなくなっても、人民は多くなる。封建は一つの宗室を利し、郡縣は萬民を利するのであるから、損益の理ははっきりと知ることができよう。」（若以爲人而置君、欲求既庶、誠宜政在列郡、然則主祀或促矣。若以爲君而生人、不病既寡、誠宜政在列國、然則主祀可永矣。主祀雖永乃人鮮、主祀雖促則人繁。建國利一宗、列郡利萬姓、損益之理、較然可知。）

「曹冏、陸機の著論を見るに誠に文體は格調高く論理は明晰だと思うが、民衆の爲に君主をたてることに本づかず、民衆の損益を考えていない。李百藥、馬周の諫言は運命が先驗的に決定しているのだ（冥數素定）と主張しており、法制の得失を考えておらず、政治原理の良否にも關連させていないのである。」（覽曹陸著論、誠謂文高理明、不本爲人樹君、不稽烝甿損益。觀李馬陳諫、乃稱冥數素定、不在法度得失、不關政理否臧。）

柳宗元

「秦が封建を改めたのは、制度としては大いに公正なものであるが、その心情は私的なものである。私情をもって自分一人を權威とし、皆を自分に臣服させようとするのである。しかしながら、天下を公有のものとする端緒は秦から始まったのである。」（秦之所以革之（封建）者、其爲制、公之大者也、其情、私也、私其一己之威也、私其盡臣畜於我也。然而公天下之端自秦始。）

「そもそも天下の道、泰平は人材を得ることによる。賢者を上におらせ、凡庸な者を下におらせ、そうした後に泰平たりうるのだ。今、かの封建制の下で世を繼いで治まっているとしよう。しかし世を繼いで治まっているのが、上にいるのは果たして賢者であろうか、下にいるのは果たして凡庸な者であろうかとなれば、民衆の治亂はまだわか

らないのだ。またその社稷に有利にしようとして、その民衆の耳目を一つにして他を知らせぬようにすれば、世の大夫は代々奉祿と土地を食み、その封地をつくしてしまう。聖賢がその時に生まれても天下に立つことはできないのであり、封建はこういうことをするのである。」（夫天下之道、理安、斯得人者也。使賢者居上、不肖者居下、而後可以理安。今夫封建者、繼世而理。繼世而理者、上果賢乎、下果不肖乎、則生人之理亂未可知也。將欲利其社稷、以一其人之視聽、則又有世大夫世食祿邑、以盡其封略。聖賢生于其時、亦無以立於天下、封建者爲之也。）

このように柳宗元の『封建論』は主要な論點はすべて杜佑の議論と一致するばかりか、最も根本的な思考樣式において杜佑と同質だと言ってよい。

もっとも「勢」を考えるのは思想史上、杜佑が初めてというわけではない。韓非子などの法家は政治における「勢」の問題を考え、杜佑が多くを學んだ『管子』にも素朴抽象的な形で論じられている。そして漢・賈誼の「過秦論」は諸侯が秦に對抗できなかったのは「勇氣や智惠の足らなかったせいではない。形勢が不利不便だったからである。」（豈勇力智慧不足哉。形不利勢不便。）とする。また漢初、諸侯王が叛亂を起こす中、長沙王だけが亂を爲さなかったのは性格のためはなく「力が叛逆を行うに足らず、……その形勢が然らしめた」（力不足以行逆、……非獨性異人也、其形勢然矣。『新書』藩彊）からだなどというのを見れば、杜佑の思想を先取りするものとも言えよう。さらに賈誼はすでに天意を歷史に介在させず、それが彼の思想の特色となっている。しかしこのような賈誼の思想は後世には受け繼がれず、董仲舒の思想の方が力を持った。[11] それゆえ杜佑に至るまで社會變動は「冥數素定」と考えられたのであろう。杜佑は遙に賈誼の思想を復活させたとも考えられ、柳宗元の「封建論」も「過秦論」をふまえていると考えられる箇所がある。但し賈誼は勢を制度と關連づけては考えず、封建を肯定しているのだが、杜佑、柳宗元は、歷史的條件の中で勢が封建をもたらし、また封建制度の構造自體から勢の不安定がもたらされると考えたのだ。この點において杜佑、柳宗元は賈誼と大きく異なり、彼らの合理的なシステム論的考察の態度は極めて劃期的なものなのである。これはまさしく法制史『通典』によって生み出されたものだろう。それはまた時代の要請によって生まれたと考えられる。貨幣經濟の浸透と安史の亂後の社會的變質のなかで、官僚たちは榷鹽法や兩稅法を實行し始めた。しかしそれは古代に前例のない新しい制度政策であるゆえに、反對勢力を說得する必要があった。說得するためには、歷代の制度を歷史的に考察することによって、その得失や有利不利は歷史的社會的條件に制約されること、卽ち窮通の理を明かにし、新しい法制が歷史的社會的條件の中で制度として有利なものである所以を示さねばならなかったに違いない。

柳宗元の「封建論」は杜佑の論を深化發展させたと言いうること、上に述べたとおりだが、柳宗元の思想は「貞符」「封建論」についてのみ、杜佑との共通性を指摘できるわけではない。例えば、杜佑は禮についても社會の進步につれて變わるべきで、徒に古禮に拘泥するべきではないと主張し、同じ主張は柳宗元にも見られる。[12] しかしまた「貞符」や「封建論」は柳宗元の思想の基底を集約的に表現した作品であることを考えれば、その共通性は表面的なレベルではなく、柳宗元は思想の根本的態度において杜佑と通じていると言えるはずである。そ

うだとすれば柳宗元のその他の作品から杜佑の影響と見うるものを一々抽出する必要はもうないだろう。そもそも最も大切な事は柳宗元が杜佑から學んだかどうかではなく、彼らのような思想がこの時代に生まれたということなのである。

以上まとめれば、柳宗元の歴史觀も杜佑と同じく歴史事象を體系化し、窮通の理を究めんとする通史的精神に支えられている。「事は皆相因る」のであって、窮通は形而上的天意やいかんともしがたい運命によって起こるのではなく、彼らはそこに合理的必然性を見いだすのだ。勿論、その場合の理も儒教の道理（聖人の意）ではなく、道義性を排した客觀的必然性である。端的に言えば、それは經濟であり、兵力である。經濟を基軸として現實に對處しようとすれば、貨幣という極めて人爲的かつ明白な基準があるので、合理的な思考がそこから必然的に生まれてくる。そして社會と文化は時に從って進歩發展し、故に社會制度もそれに從って變わるべきだとする。このような思想もやはり當時の社會的現實が生みだしたものだろう。財務官僚たちは利を言うことを嵎む傳統的儒教道德に對抗するために、制度政策は「時の宜しきに適う」ことを主張し、新經濟政策を擁護する必要があったからである。

おわりに

唐代半ばにおいて斷代紀傳體に對して編年通史が復興してきたことの理由と意味をまとめておこう。思うに『漢書』を代表とする斷代紀傳體が讀まれてきたのは、社會の變化がまだ緩やかで靜的な時代にあっては過去の事跡を知れば、知識がそのまま教訓として役立ちえたからだろう。少なくともそう信じられえたのではないか。ところが貨幣經濟の本格的浸透に伴う新しい現實――それは常に動き發展していく動的な社會である――のよってきたる所を究明理解し、將來の展望を開くには單に過去の事實を知るのみならず、その窮通の理を知らなければならなくなったのだ。求められる知識の質が變わったのである。それゆえ通史が求められ、それが經學においては當然、春秋學の見直しとなった。そう考えるなら、この時代の春秋學が傳注の墨守を批判し、己の理性によって解釋する態度を採り始めた理由も理解できよう。動的な社會では傳注墨守的精神は役に立たないからである。

このような態度は周知のように古文と通底するものだ。そして窮通の理を考えるならば、天意や身分の高下の價値を否定することになろう。それらは窮通になんら關係しないからだ。それが引いては人間の個性を描こうとする文學を生み出したと思われる。この新しい史學を生み出す契機となった兩稅法は王公貴族と雖も免稅の特典を認めず「貧富を以て差と爲」（建中元年宰相楊炎の上奏・『唐會要』卷八三・租稅上）したものであった。これは「傳統的な身分をもって差となす考えに反對する言葉」なのである。[13] その考え方が永貞の頃には高貴の人でも功業に見るべきものがなければ事蹟を記す必要はなく、爵位に關係なく重要人物は歴史に書き殘すべきであるという所まで發展している。（凡功名不足以垂後而善惡不足以爲誡者、雖富貴人、第書其卒而已。……然則志士之欲以光輝于後者、何待于爵位哉。『唐會要』卷六四・史館雜錄下。路隨「不載元韶事迹議」）窮通の理を考える史學からこのような主張は當然出てくるものだろう。またそれが重要人物の內的個性へと人々の視點を向けさせることになったはずだ。永貞元年九月、その旨を上奏したのは有名な史官路隨であった。彼はその父（泌）の代から柳宗元の家とは親しく、彼自身は王叔文によって宰相

となった韋執誼の從兄弟韋夏卿の幕僚から官界に出、柳宗元とも親しかった人物である。

注

(1) 瞿蛻園『劉禹錫集箋證』(上海古籍出版社) の考證によれば、劉緒は、劉晏の部下として江淮の咽喉とされた要地埇橋で鹽鐵の職務をとっていた。これは劉晏の腹心である盧徵の引き拔きであろうとされている。この盧徵は劉氏と姻戚關係にあり、劉禹錫にとっては堂舅にあたる。同書一五五五、一五五九、一五八九頁參照。

(2) 韓愈『順宗實錄』や『新唐書』杜佑傳などを見れば、杜佑は王叔文を苦々しく思っていたようだが、これらは王叔文らを批判する立場から書かれたものだ。もし杜佑が王叔文一黨に本當に批判的であったのなら、彼はなぜ王叔文らの意向どうり度支・鹽鐵轉運使になったのか。擔がれてわからぬ杜佑ではないはずだ。それから考えると『順宗實錄』も『新唐書』もそのまま信用するわけにはいかない。

(3) 唐朝が所謂武力國家から財政國家へと變貌したことについては、例えば、宮崎市定氏の諸研究、また日野開三郎氏の諸研究(三一書房『日野開三郎 東洋史學論集』第一卷「唐代藩鎭の支配體制」、第三、四卷「唐代兩稅法の研究」)などを參照。

(4) (1)を參照。

(5) 『通典』に關する研究のうち、金井之忠『唐代の史學思想』(弘文堂)には多くの啓發を受けた。

(6) 『通典』は版本に問題の多い書物であるが、ここでは中華書局點校本を用いた。

(7) 內藤湖南『支那史學史』第八章「六朝末唐代に現はれた史學上の變化」補說。

(8) 島一「『通典』における杜佑らの議論について」(立命館文學創刊五百號記念論集)は財務官僚としての杜佑の議論をまとめて檢討している。

(9) 同上。また氏は杜佑、趙匡、沈旣濟らの思想が韓愈やその周邊の古文家に受け繼がれていると、重要な指摘をしておられる。

(10) 稻葉一郎「中唐における新儒學運動の一考察——劉知幾の經書批判と啖・趙・陸氏の春秋學——」(『中國中世史研究』中國中世研究會編 東海大學出版會)

(11) 祝瑞開『兩漢思想史』(上海古籍出版社) 六八頁を參照。

(12) 『時令論』や『非國語』など。

(13) 礪波護『唐代政治社會史研究』(同朋舍) 三七九頁。